

北九州市発達障害者支援地域協議会

(平成2年10月12日)

北九州市
スクールカウンセラー(SC)

シャルマ直美

SC活動の概要

- 文部科学省が、平成7年度から「SC活用調査研究委託事業」としてスタート。現在は「SC活用事業」
- 北九州市は平成11年から配置。平成16年には全国に先がけて全中学校配置。その後、全小学校にも配置。
- 現在60数名のSCが、全小中学校、特別支援学校で活動。
- 1中学校区あたり、児童生徒数に応じて、年間8時間×34週～16時間×34週をペアで受け持つ。月に1～3、4回程度担当校を訪問。

SC活動の概要

- 児童生徒の発達促進や、適応支援のために活動。
- 支援の対象者は、児童生徒・保護者・教職員。
- 「北九州子どもつながりプログラム(対人スキルアッププログラム)」「生涯にわたるメンタルヘルスの基礎教育(自殺予防教育)」に関する教職員研修と授業や、「5年生全員面接」など、相談業務に加えて予防的活動が期待されている。

SC活動の実際例(小・中学校)

- ・学習上の発達課題。
- ・対人関係を中心とした行動上の発達課題。
- ・不登校や、登校しぶりにみられる集団不応。など



個別相談



医療機関・特別支援教育専門機関への紹介

※SCがかかわれない場合もある

事例(小学生)

- 幼稚園では、先生に配慮ある対応をしていただき、他児にお世話してもらって卒園。
- 小学校入学直後から、離席もあり、1時間の学習課題を終わらせることができず、感情のコントロールも難しくてトラブルが多発。
- 保護者に発達障害への気づきがなかったが、ひとつひとつ現実の問題に向き合いながら受診。特別支援学級への就学相談。担任、コーディネーター、管理職、SCによるサポート

事例(中学生)

- 入学後、頻繁な登校しぶりがみられた。
- 保護者がSCに相談。その中で、発達障害のことが話題になり受診。
- 診断を学校生活に結び付けて、かかわりについて先生方と話し合い。



教室不適応の背景にある発達障害についての理解より
教室適応行動が優先された



不登校

SC活動の実際例(高校)

- ①・学習上の不応(課題を提出できない、欠点など)
- ・学級集団不応(友人関係がつかれない、など)



SCが本人や保護者をサポート、先生方への説明 → 応

- ②不登校状態➡欠課時数オーバーによる現級留め置き



転学に向けてのサポート

※SCがかかわれない場合もある

事例(高校)

- 中学校までは特性が個性の範囲で、本人なりの楽しみもあって学校生活を過ごしていた。
- 高校は新しい環境であり、本人のことを知らない生徒たちからの配慮のない言動や、中学校までとは違う学習方法・課題提出などへの不適應感があり、体調不良による欠席が増える。
- SCとして、本人が環境適應できるよう、保護者から生育歴を聞き取ったり、先生方へ説明したり、本人を定期的に励ましたり、場面に合った他者とのかかわり方を練習したりした。
- 他機関主催の校外の活動を紹介。

北九州市発達障害者支援地域協議会 主な検討課題(案)より～SC関連～

①気付き

- ・できるだけ早い方が良いが、気付けた時が好機
- ・保護者や先生方が気付けるための啓発・情報発信が重要

③特性理解と支援

- ・苦手さからくる困り感への対処(工夫)
- ・二次障害にならないように、肯定的理解と
「今の自分にOK」「今の自分にできることから」「少し前の自分と比べよう」
- ・大人になっていく人としての期待を求めることも

⑤多職種連携

- ・学校内外で
- ・学校組織の中で、その一員であるSC

⑧学齢期児童生徒の支援(自己理解、ライフスキル、思春期の問題行動への対応)

- ・「自分自身」と向き合ったり、他者と比較したりする中での苦しさ ⇒ 自分らしさへの気付きに
- ・(学校内外の)多様な体験を積み重ね、ライフスキルを身に付ける ⇒ 青年期・成人期の自立につなぐ

⑨青年期から成人期(就労・生活・二次障害予防)

- ・就労、生活をみすえた学齢期の発達支援

⑩家族支援

- ・「気付き」を支える
- ・発達段階に応じた「自立に向けて」の子育てを支える
- ・大人の生活ロールモデルからの学び
- ・ともに未来への希望をもつ

⑪地域で暮らす

- ・相談機関の活用、支援者とのつながりを作る経験を学齢期から